

冷暖房

「より便利に、より豊かに」を合言葉のように、人間は進歩してきた。囲炉裏からエアコンへ、扇風機からクーラーへ、冷暖房器具の開発も進み、今、ひとつの到達点に達したようだ。「古き良き時代」という言葉がある。古いものはずが悪いわけではないが、今が、昔をふりかえる良い機会かもしれない。

だるまストーブ

- 白熱化する「冷風」(ルームクーラー)合戦 果して扇風機を駆逐するか『財界』昭34・6・1
- 三万円でできる冷暖房 近代科学が生んだ驚異『日本』昭35・9
- 燃える石油ストーブ・リーグ J I Sと消防庁マークの対立『週刊朝日』昭37・11・30
- あなたの暮しにセントラルヒーティング「集中暖房」は必要か?普及率わずか5%という「未来生活」の花形『週刊朝日』昭43・11・29
- 熱い戦争「ストーブ・リーグ」が始まった 暖房革命に乗り出した温風暖房器『週刊読売』昭47・12・9
- コインクーラー販売でシノギを削る30人の社長たち「同じ土俵」で腕くらべ『経済界』昭48・6・1
- 湯たんぼのよさを見直す 電気代いらずガス代いらず灯油関係なし『暮らしの手帖』昭49・2
- 今週のなんでもベスト10 暖房小物 受験生はズボン式足温器でガンバル『週刊平凡』昭53・2・9
- クーラーついに品切れ, 600億円の売り上げ増『週刊平凡』昭53・9・14
- 全く火を使わない100円カイロが登場『旅行ホリデー』昭53・11
- いま湯タンポが一人寝のヤングにバツゲンの人気『週刊平凡』昭54・2・15
- ダルマストーブの復活 鋳物の町に石油危機の余波『週刊サンケイ』昭54・11・8
- 暖房機器今年のベスト 電気掛け毛布がいいか, 電気敷毛布がいいか(田口秀子)『特選街』昭54・12
- PLAY&LIVING インテリア・エアコン『週

刊平凡』昭55・5・29

- 新しい暖房器具 ラジアントヒーターとはどんなものか『暮らしの手帖』昭56・6
- 産業情報 住都公団で放熱ロス半分の暖房用温水パイプを開発『WILL』昭58・12
- 現代生活の中でサバイバルしたコタツ『平凡パンチ』昭58・12・5
- 東芝の新技術インバーター方式が無意識空調時代を実現した『週刊現代』昭59・4・21
- この冬, 快感!コタツライフの最善計画 ファッションナブルなスタイルのコタツが寒さに向けて勢ぞろい!『MORE』昭59・11

話題人間の履歴書

村上春樹

村上春樹は現代日本のカルト・ライターである。アメリカにおける50年代のJ・D・サリンジャー、60年代のカート・ヴォネガット、現代のジョン・アヴィングと似た読まれ方をしている。大学生を中心とした若い世代が支持し、キャンパスの書店ではベストセラー・リストに常に載っている。

村上春樹は読者に、彼の作品はよくわかる。あるいは自分にしかわからないと思わせてしまう。それは彼が私生活をそのままに、自分の気に入った、ごく身近な世界しか描かないからである。冒険小説という形をとっていても、構造は「好い気分」の集まりなのだ。この気分がそれぞれに形を変え、何かを探している若い精神の核に住みついでいく。それがカルト・ブックである。

村上春樹経由の文学というのがある。簡単に言えば、彼の翻訳、紹介によって人気を得た作家ということだ。その最たるものは、レイモンド・カーヴァーであり、彼は「僕の本は日本で三万部売れたんだぜ」と言っている。現在ではずっと部数も伸びているはずだ。他の翻訳家が手をつけていたら、それ程売れなかったのではないだろうか。ジョン・アーヴィング、F・S・フィッツジェラルドも然りである。カルト・ブックの裏側には、単なる流行りものとしての一面がある。そのブランド・「村上春樹」・タグに対して、えらい人たちは、若者が彼の作品を本当にわかっているのかと訝る。一方、同時代の読者はよくわかると肌で感じる。これが村上春樹のカルトたる所以である。「四年後の四十になるまでに納得できるものを」と当の本人は語っている。

1924年京都府生まれ。『風の歌を聴け』で群

像新人文賞、『羊をめぐる冒険』で野間文芸新人賞を受け、本年度『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』で谷崎潤一郎賞を受賞した。(K.S.)